三重大学 高等教育創造開発センター 第44号

News Letter

■2015年6月4日発行　■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、昨年度は10件が採択されました。本号では、シリーズ第6回として、岡野昇先生の「保健体育科教育法Ⅳ」におけるPBL教育の実践報告を掲載します。

2014年度開講 「PBL教育支援プログラム：振り返りの工夫」成果報告 (6)

「　保健体育科教育法Ⅳ　」

実地研究型PBLとしての授業の取組

今回、2014年度後期教育学部で開講された専門教育科目「保健体育科教育法Ⅳ」を実地研究型PBLとして取り組んだ。本稿ではその授業展開の紹介と若干の考察を報告する。

本授業は、前期に開講されている専門教育科目「保健体育科教育法Ⅱ（Ⅰ）」（『News Letter. 第38号』参照）の単位取得後に履修が義務付けられており、中学校・高校の保健体育科の授業を行うということの自覚と責任と実践的指導力を身につけることを学習の到達目標としている。また、学習の目的が、器械運動、陸上競技、球技、武道、ダンス、体つくり運動、保健などの授業デザイン・実践・省察を通して、保健体育科の授業計画・教材開発・授業研究について学ぶため、授業は模擬授業を中心に実践的かつ演習的に展開した。

基本的には、二つの授業（一つは模擬授業実践を中心とする〈授業Ⅰ〉、もう一つは模擬授業リフレクションを中心とする〈授業Ⅱ〉）を1パッケージとし、6つのパッケージを設定した。1つのパッケージの展開例（図1）は、「①〈事前〉として、個人やグループによる授業デザインの作成」→「②〈授業Ⅰ〉として、全体で模擬授業実践の実施」→「③〈事後・事前〉として、個人による学びの履歴・エピソード記述・授業記録の作成」→「④〈授業Ⅱ〉として、全体による模擬授業リフレクション」→「⑤〈事後〉として、学びの履歴・授業デザインの再作成」である。また、担当教員は、各プロセスにおいて、AからEの5つの「学びを促す支援」を行った。

授業アンケートの結果から

授業アンケートにおける「総合的に判断してこの授業に満足できた」は平均値が4.67（5点満点）であり、「教師を目指す上で意味のある授業であった」は平均値が5.00点（5点満点）であったことから、概ね本授業は受講生に受け入れられたものと思われる。

4つの力の項目では、「考える力（92.8%）」が役立ったと回答したものが最も多く、次いで「感じる力（82.0%）」「コミュニケーション力（77.8%）」「生きる力（72.3%）」の順であった。また、4つの力に関する17項目のなかでは、「課題探求力（77.8%）」と「指導力・協調性（77.8%）」が最も多く、次いで「主体的学習力（72.2%）」と「専門的知識・技術（72.2%）」であった。これらのことから、「考える力」が求められる授業の展開となっており、具体的には他者との協調により、主体的・能動的に課題を探求することを通して、専門的知識や技術が身につく授業として位置づいていたものと推察できる。

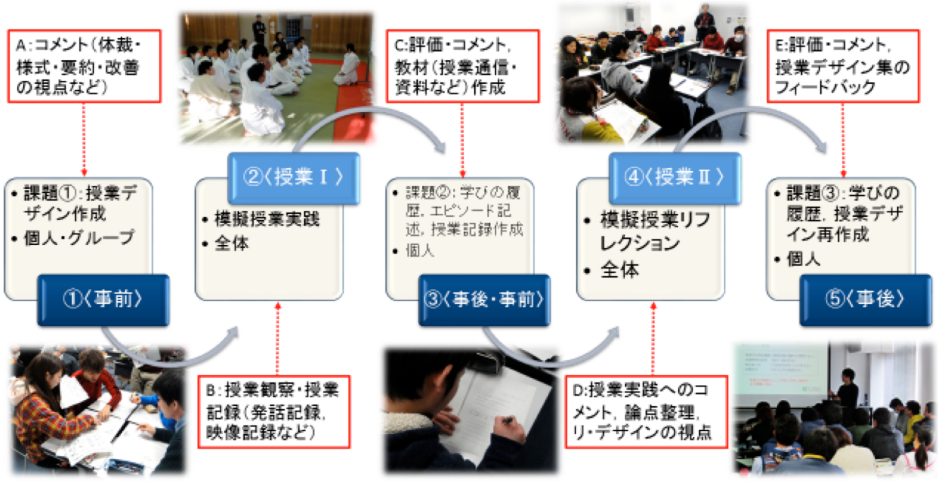

図1　1パッケージの展開例

自由記述を概観すると、次の通り3つの内容に大別することができた（○は肯定的意見、●は改善的意見）。1つ目の〈教育実習〉からは、自分のいま取り組んでいることが何につながっているのかという点を明確にしておくことの重要性が再確認できた。2つ目の〈自分気づき〉からは、学びとは他者との協同によって構成されるものであるが、自己変容・変革を起点とする個人的な営みであることが再認識できた。3つ目の〈学びを促す支援〉からは、学生の非教育体験や思い込みに揺さぶりを与えるコメント、学生の多様な感じ方や考え方を編集した教材作成などが、授業の成否につながると再認識できた。授業の運営面では、特にBの展開に改善の余地が認められるため、次年度の課題としたい。

①〈教育実習〉

○教育実習に向けてよい準備ができるのでとてもよいものでした.
○来年度の教育実習を迎えるにあたって，指導案作成かつ模擬授業はよい経験となりました.
○指導案の作成，教材研究は教育実習のため，教員になったときに必要不可欠なものであると思います.
○実習に行くにあたっての準備をする方法や手段がわかり，準備をする力がつく.

②〈自分気づき〉

○模擬授業を行ってみて自分が想定していた授業進行や生徒の思考と大きな差が生まれることに気づいた.
○私も教育法の中での気づきにより，新しい発見や再確認することができました．保健体育でも必要な思考力を育むためにも，生徒自身に気づかせる，考える余地を残す授業展開をお願いします.
○指導案を実際に作って，模擬授業を行ったことによって，自分に足りないこと，まだ理解していないことが多く見つかり，学ぶ意欲があがったため，このような形式は続けてほしいと思いました.
○これほど自分で考え行う授業を初めて行った．今までは教師主体の授業であったが，学習者を主体とし，かつ学習者を成長させるようにするということを続けてほしいと感じた.

③〈学びを促す支援〉

A:コメント（体裁・様式・要約・改善の視点など）
○自分たちで考えた指導案に対して厳しくチェックし，私たちに考える機会を与えてくれたこと．このことによって，授業を考える際，先生の指導をもとにいろいろな視点から考えたり，調べたりすることができるようになった.
○指導案を出しに行っても何度も何度も書き直しをくらいました．しかしそのおかげでその領域の教材研究がかなり深まった.
○指導案作成で見通しをもったカリキュラムを組むことができた.

B:授業観察・授業記録（発話記録，映像記録など）
●時間の関係上，厳しい部分もあったかもしれないが，全員が模擬授業を指導する機会をつくりたい.
●模擬授業の授業者が限られてくるので，全員が授業者をやるという心構えを持てる授業を取り入れたいと思った.
●模擬授業では，緊張感を持たせるためにも，授業を受けていない人も見学可能にしたらよいのではないかと感じた.

C:評価・コメントと教材（授業通信・資料など）作成
○学びの履歴が掲載されているプリントで毎回先生からの学生に求めていることや，学ぶべきことのコメントがあって，毎回それを見るたびに，自分はまだまだ学ぶことがたくさんあると危機感を感じていたのでぜひそれは今後も続けてほしい.
○毎回の授業通信を見て，モチベーションをあげて授業に取り組むことができた．その場での振り返りと1週間後の振り返り，さらに半年，1年，その後の振り返りができるので，学びの履歴カードと授業通信はずっとあってほしいし，私自身も教師になったらやりたい.

D:授業実践へのコメント，論点整理，リ・デザインの視点
○討論が止まってしまったり，論点のレベルが低くなってしまっているときの声かけが，討論を進めていくときの手助けとなっているので，的確で厳しさのある指摘を続けてほしい.
○生徒同士の話し合いは他人の意見を聞き，学び合いが生まれるので，とてもいいと思い，私も取り入れていきたい.
●リフレクションとしていただけた時の資料をもう少し見ていたり，メモしたりしたかった.

E:評価・コメント，授業デザイン集のフィードバック
●課題の量などが少し多いと感じることがあったが，体育の授業づくりやその競技に関する知識などの専門性は高まった.

学び研究のサイクル

今回の授業実践から、実地研究型PBLを展開する際、図2のような「学び研究サイクル」モデルを提示することができる。常に授業の目的を明確にしながら（Visionを明確にする）、授業を5つのプロセスとしてとらえ、有機的にサイクルさせるというアイディアである。

しかし、あくまでもこれはひとつの「しかけ」に過ぎない。重要なことはこのシステムによって、「学習者」の心に火をつけ、「学び手」へと変身させてあげることだと思う。

（岡野　昇）

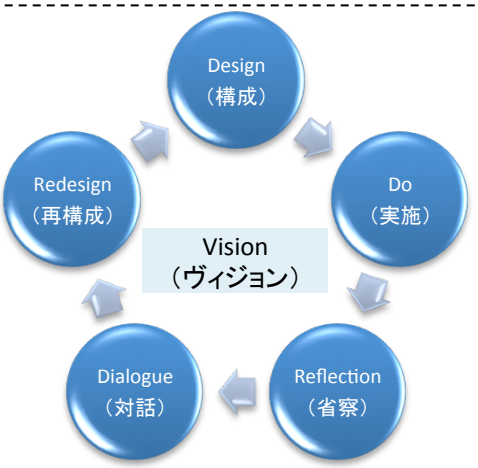

図2　学び研究サイクル